

本棚 ぶらり

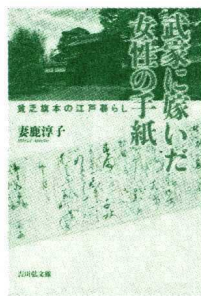
武士の出世事情

比較的平和だったとされる江戸時代。そんな時代の武士にとって、幕府の役職や人事は一大関心事でした。

『お殿様たちの出世 江戸幕府老中への道』(山本博文著 新潮社 2007)は老中という役職を中心に、江戸城内の政治体制の変化を追っています。初期には將軍の側近だった老中ですが、中期には政治の実務の中心となります。ところが幕末には、部下が思わず「馬鹿」と言ってしまうほど力のない存在になってしまいます。

大名より格下の旗本や御家人(※)にとっては、役職につけるかどうかは死活問題でした。

次に紹介する『武家に嫁いだ女性の手紙 一貧乏旗本の江戸暮らし』(妻鹿敦子著 吉川弘文館 2011)は万喜という女性の手紙をまとめたもの。二回目の結婚で旗本の妻となった万喜には最初の夫との間に精五郎という息子がいました。精五郎は御家人の養子となりましたが、成人しても役職に就くことができません。役職に就く上で有利と考え鉄砲などの稽古事に励みますが、道具類などの費用がかさみ借金は増える一方。これでは生活が立ち行かない、内職に専念しようと決心した矢先、役職につくことができました。万喜は大変喜び、さらにいい役



『武家に嫁いだ女性の手紙』

一貧乏旗本の江戸暮らしー
めがあつこ
(妻鹿敦子著 吉川弘文館)

職につくことを期待しています。

3冊目に取り上げる『代官の日常生活 江戸の中間管理職』(西沢敦男著 講談社 2004)では、御家人から旗本へと格上げされた小野左太夫一吉という人物が紹介されています。一吉は、薄給の大奥進物取次上番、御徒目付と昇進し、さらに上の勘定方へと進みます。この時、御家人から旗本へと格上げされました。さらに一吉は、幕府直轄地で徴税や警察機能などを担う代官となり「利発之代官」と賞され、のちに大身の旗本が務める勘定奉行にまで出世しています。

一吉のような目覚ましい出世の例は江戸時代中・後期に十例以上あり、万喜が知っていたとしてもおかしくありません。いずれは出世して落ち着いた暮らしを・・・と子に望むのは親の常のようですね。

(※) 旗本や御家人 徳川家直属の家臣のうち、將軍に拝謁できるのが「旗本」、できないのが「御家人」です。就ける役職も違い、旗本の就く役職の方が御家人の就く役職より役料(役職に伴う給料)も多かったのです。

大人も楽しめる



絵本の世界

第9回



鈴木のリたけ

『かわ』 鈴木のリたけ作 幻冬舎 2010

『かわ』というタイトルを見て、皆さんはどんなイメージを頭に浮かべたでしょうか? 漢字でも「川」と「河」という二文字があります。澄んだ水の清々しい溪流が頭に浮かんだ人もいれば、ゆったりと流れる大河の姿に想いを馳せた人もいるでしょう。用水路のような細い川や、故郷の懐かしい川の風景を思い出した人もいるかもしれません。

この本は、山に雨が降り小さな流れとなり、それが川の源流に流れ込むところから始まります。水は、溪流→上流→中流と流れていき、里川や湖や沼へ、用水路から田んぼへ、そして下流から海へと、壮大な旅を続けていきます。水の循環の中で、豊かな自然が育まれていることを描くのがこの本のコンセプトです。そのために、川の中の様子を詳しく、鮮やかな色合いで、隅々まで書き込んでいます。生き生きと動きまわる魚がたくさん登場するので、見ていて退屈することがありません。

同じ作者の作品で、これまで5冊が発売されている「しごとば」(プロンズ新社)というシリーズがあります。適度なデフォルメを加えつつ、ユニークな視点から圧倒的な情報量を盛り込む、とにかくインパクトのある画面構成にするのがこの人の魅力です。